「0.5ミリ」の先行特別上映で監督の安藤桃子さんと共にキノにお越しいただいた時、「「0.5ミリ」では私の心の中は空っぽになってしまい、もう何もできなくて残っているのはこの肉体だけ、『百円の恋』ではその肉体のすべてを出し切って、私はからからに干からびています」と、ほわほわとした可愛らしい笑顔でお話しされました。

「映画と闘って傷ついたりすごく感動したり愛したりということを少しずつ経験していく中でいつのまにか女優さんみたいになっていることに最近気づいて驚いている。この気持ちはヤン・コンヒ監督の『かぞくのくに』、安藤桃子監督「0.5ミリ」、武正晴監督「百円の恋」とのかかわりが大きく作用していて、映画に出る時、なかでも特に主演する時って、肉体や魂の半分を監督に預けるような感覚になり、今までご一緒した監督たちって全力で受けとめる方たちで、私がどこから飛び降りようとしても大丈夫って両手広げて待ってくれるような。ヤンさんは抱き合いながら一緒に飛び降りちゃった感じですけど。一緒に死ぬ気で闘おうと思わせてくれる監督たちだった。そういう仕事を通して、私は監督・役柄・作品と絶対的に信頼し合って愛し合ってきて、これってすごく贅沢なこと。」

「『0.5ミリ』の後、あ！もうできない、というときがあって、そういえばと、思い出したんです。深夜のバイトをしつつ独りアパートに暮らす"時価百円の女"一子32歳の、傷だらけのサバイブ劇『百円の恋』。そのオーディションの記事を新聞で見つけた母が「あなたボクシングの経験あるしこの役って絶対サクラだと思うよ」と。これを思いだしたとき今の現状を変えるのはこの映画だけだ。オーディションがあるじゃないか！」と。壮絶な日々の幕開けだった。」

「あのデブからボクサーの体に10日間でなるなんて自分でも信じられない。人間の身体のスゴさを感じたし、実際に比喩ではなく本気で死ぬんじゃないかと思った瞬間もありました。撮影が終わった後もしばらく尾を引いて、そんな時期を経てしみじみ、あめこれは安藤サクラ個人としては人生最大のワガママだったなと。すべてを忘れてどっぷりと、やりたいことをやりつくしたんですから。」——キネ旬のサクラさんインタヴューより一部抜粋

撮影中ずっと彼女のことを一子さんと呼んでいた。彼女がいなければこの映画はできていなかったなと、「百円の恋」を観るたびに思ってしまうと語る武正晴監督。12月4日（木）には監督をお招きしての先行特別上映を行います。

キノのお正月はミニシアターの巨匠たちが勢ぞろい！

10歳の少年、都へ行く

天才スピヴェット

ジャン＝ピエール・ジュネ監督

「原作の『T・S・スピヴェット君傑作集』を初めて読んだとき、見事な登場人物、感動的なストーリー、豊かなディテール、モンタナの開放的な空間にワクワクし、彼が最後のスピーチですべてを語るシーンには衝撃を受け鳥肌が立った。その1文だけでこの物語を映画にする！と決めんたんだ。難航したのはスピヴェット役。ある日、9歳の子供をテストしたが、7歳にしか見えないとても小さな子供だった。しかし風変わりで引き込まれるものがあり唯一無二のものを感じたんだ。それがカイル・キャトレットだ。」とジュネ。大好きな双子の弟の死で家族みんなの心にポッカリ空いた穴を、小さな体で懸命に埋めようとする姿が切ないスピヴェットの驚きと感動、冒険の物語です。

ワンダ、あなたは何者？

毛皮のヴィーナス

ロマン・ポランスキー監督

「戦場のピアニスト」「ゴーストライター」の巨匠・ポランスキーが描くのは、「マゾヒズム」の語源となったザッヘル＝マゾッホの自伝的小説に着想を得た戯曲の映画化。無名の女優ワンダと自信家の演出家トマ、舞台のオーディションのはずがいつしか本気の二人芝居へ…彼女を見下していたはずのトマは惹きつけられ、ワンダは圧倒的な優位へと立っていく。物語と現実の境界線があいまいになりやがて信じられない結末を迎える。最初は妖婦のような女が最後には毛皮を着た女神に、実力派女優エマニュエル・セニエ、ワンダに翻弄されるトマにはカメレオン俳優のマチュー・アマルリック、そしてポランスキー、3人の掛戦から生まれたセンセーショナルなサスペンス！

激動の時代、ふたりはめぐり逢う

暮れ逢い

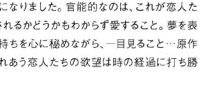
パトリス・ルコント監督

「この映画は、記憶に残る、強烈で官能的な映画です。ライティングやセット、撮影方法、脚本、リズムなど、すべてが巧みに練られていて、めまいをひき起こすようなこの感覚を、物語が見事に伝えているからです。そして本質を貫こうとシュテファン・ツヴァイクの原作の意志を尊重しました。その結果それぞれのシーンが、秘めた何か、言葉で語られないがまぶしい何かを帯びたものになりました。官能的なのは、これが恋人たちの欲望についての映画だからです。愛されるかどうかもわからず愛すること。夢を表現することができぬまま、夢みること。気持ちを心に秘めながら、一目見ること…原作は壮大な問いを投げかけています。惹かれあう恋人たちの欲望は時の経過に打ち勝てるのだろうか、と。」（ルコント）

今に息づく自由という大樹

ジミー、野を駆ける伝説

ケン・ローチ監督



映画は10年ぶりに故郷に舞い戻ったジミーが、野にうち捨てられたかのようなホールを再建させるところから始まる。ローチは老若男女が分け隔てなく人生について語りあい、音楽や詩の魅力に触れ、歌や踊りに興じる幸福な光景をカメラに収めるとともに、理不尽に強圧にさらされてゆく彼らの過酷な運命を描く。ジミーがアイルランド人として唯一、裁判も開かれずに国外追放処分を下されるにいたった経緯を映し出す。そして何よりローチは野を駆け、野に生きた労働者でもあったジミーが訴え続けたまっすぐな想いを未来へのメッセージとして深く刻む。

「我々は人生を見つめ直す必要がある。欲を捨て、誠実に働こう。ただ生存するためではなく、喜びのために生きよう…自由な人間として」！

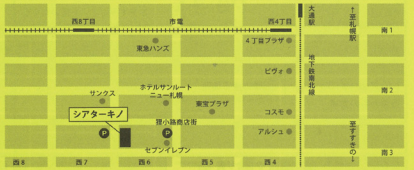
今号のごあいさつ

雪が降り始めましたね。クリスマスからお正月へ、ミニシアター映画の巨匠たちの作品がそろいました。「アメリ」のジュネ最新作「天才スピヴェット」はまるで驚きの絵本のような素敵さ、少年の旅の果てには"そんなに頑張らなくてもいいんだよ、おうちへ帰ろう"と抱きしめたくなるような感動が待っています。ポランスキーが放つ魅惑の世界「毛皮のヴィーナス」、恋愛映画の巨匠ルコントの「暮れ逢い」、そして引退がさやかれているケン・ローチ監督の力作「ジミー、野を駆ける伝説」、見逃せません。

なにげない"おやすみ""おはよう"という言葉がとても深く様々な表情を持っていることに気づかされます。人生の選択に心が引き裂かれそうになりながら、母が娘へ想いを託した「おやすみなさいを言いたくて」。ピーター・ブルックがこのようなことを語っています。「もうずいぶんと長いことおめにかからないが、中世の人間が日常的に眺めていたのが砂時計だ。砂時計を見ていると、小さな砂が一粒ずつ上から下へと落ちてくる。その一粒に時の意味を感じとる。中世の人はこれを見て"人生は短く、無駄にできない"ことに気づいていた。まさにこのイメージを自分の奥底に、無意識に持たなければいけない」と。流れてゆく"時"の尊さを心に留めて、少し早いですが今年も一年ありがとうございました。世界中の様々な映画たちとの出会いを楽しみに、2015年もよろしくお願いいたします。

支配人　中島ひろみ

2015年度 キノ会員募集　12月14日（日）より受付開始！
ご利用期間：2015年4月1日～2016年3月31日
ビンテージ・スタンダード・シニア・学生会員　詳しくは専用チラシをご覧ください。



THEATER KINO
札幌市中央区狸小路6丁目南3条グランドビル2F
TEL 011 231 9355
www.theaterkino.net / webmaster@theaterkino.net